

## 子は、いらん

私たちの特別養護老人ホーム任運荘にも、月一回老人大学が開かれて一年たった。「町には寿大学がある、私たちも勉強したい」という一婦人の発言がその発端であった。主任講師は私。

先日の講義は―啄木について。同年齢ぐらいだし、名前は知っていると認めてのこ  
とだが、一人もいない。失望をおしかくして、「たわむれに母を背負いてそのあまり  
軽きに泣きて 三步あゆまず」の解説を始める。啄木の孝心こうしんに心泣く静けさが、突如、  
婦人の叫びで破られた。「子はいらん。当てにならん子はいらん」と。皆も同じ思い  
なのだろうか、沈黙は続く。涙のある沈黙。私は啄木の「なみだは重きものにしある  
かな」の歌で話を結ばねばならなかった。

老人の教材には、やはり詩や歌といった短い表現がむいている。ある日の講義は―  
良寛の歌。良寛和尚が晩年知り合った若き美ぼうの弟子貞心ていしん尼にへ詠よんだ二首。「天が  
下滴つる玉より黄金より春のはじめの君がおとずれ」「君は忘るる道はかくるる今頃

は待てどくらせど訪れのなき」

良寛七十歳を過ぎての歌であるだけに、その日の老人たちの感動は高まっていくばかりであった。これほど生き生きとした表情を示したことはこれまになかった。愛と性、それは若き日のみの占有物でなく、老いにおいても、なお強く生き続けているものようである。

歌を板書した黒板はしばらく廊下に置かれるが、メモする人、通りがかりに声をあげて読む人、「胸の奥がじーんとする」という人。

「任運大学」をしていて、つくづく思う。生きることとは学び続けることであると。死を前にする人びとへの教材選び、それは私自身の生死の問題と深くかわりあっているようだ。

(一九八三年一月二十五日)